みやぎ復興つうしん

H24 9月号

発　行
社会福祉法人　宮城県社会福祉協議会
宮城県災害・被災地社協等復興支援ボランティアセンター
〒980-0011
宮城県仙台市青葉区上杉1丁目2番3号 自治会館2F
TEL: 022-266-3952　FAX: 022-266-3953
URL: http://msv3151.c-bosai.jp/

宮城県社会福祉協議会
「被災地の地域福祉活動指針（ガイドライン）」の作成
～明日へ向かって 災害に備えた社協へ～

指針作成の主旨は、宮城県社協及び各市町村社協の被災者（地）支援活動（災害ボランティアセンターの運営、被災者支援事業の運営、「地域福祉」事業の復旧等の業務）を振り返り、評価・反省を行い、現在被災している方々に対して、今後どのような対応・仕組みが必要か提案するものであります。

また、今後の大規模災害に備え、これまで社協が行ってきた災害対応の仕組・制度を再検討しながら、県内社協関係者の総意を得て、次につながる事業・提案を行っていくものであります。

指針策定にあたっては、県内市町村社協、学識経験者等から委員を選出し、検討委員会を設置することにしております。

委員会では、被災した方々が住み慣れた地域で「安心してくらすこと」「自分らしい生活をおくること」ができるような地域社会を実現するため、関係者が今後行わなければならない施策を確認していくことにしており、来年の3月末までに取りまとめて、報告書を作成していく予定です。

なお、委員会の検討資料とするため、県内の35市町村社協を対象にアンケート調査を10月下旬までに行うことにしております。

ご多忙のところ各社協や関係者の皆様には、お手数をおかけいたしますが宜しくお願いいたします。

平成24年度 市町災害ボランティアセンター 活動状況

震災後1年半が経過し、これまで全国から52万人超のボランティアさんに活動をいただいております。

おかげさまで現在は、一部の被災地を除き収束の傾向にあり、平成24年4月から7月までの活動実績は、約4万5千人で昨年同時期の14.4%と減少してきております。

市町名			1 仙台市	2 石巻市	3 塩竈市	4 気仙沼市	5 名取市	6 多賀城市	7 岩沼市	8 東松島市	9 亘理町	10 山元町	11 七ヶ浜町	12 女川町	13 南三陸町	計
累計（4～7月）	ニーズ受付件数	自然・災害系	0	52	0	26	0	0	1	14	1	14	28	12	30	178
		生活支援系	0	4	0	47	7	14	90	3	7	11	26	99	1	309
	派遣区分（件数）	自然・災害系	81	423	0	144	9	0	5	24	7	97	212	18	797	1,817
		生活支援系	105	7	8	98	751	32	150	11	41	78	208	108	132	1,729
	派遣人数	自然・災害系	525	2,676	0	529	30	0	15	116	41	1,958	13,317	258	17,355	36,820
		生活支援系	747	46	145	488	3,373	141	361	35	391	456	769	945	260	8,157
	問合せ件数		0	2,095	0	207	207	98	169	101	1,282	999	3,770	384	3,593	12,905

column

あれから1年半・・・ 女川町で見かけた光景（9月11日）

東日本大震災で壊滅的被害を受けた女川町、あれから1年半。コバルトラインの分岐点手前にある“きぼうのかね商店街”。その中の奥まった所に「希望の鐘」があります。大津波によって女川駅前広場にあった時計台も駅とともにすべて流出しましたが、女川町の復興のシンボルとして見事によみがえりました。また、女川港沿いの熊野神社前の道路沿いには“とりもどそう笑顔あふれる女川町”の言葉に続き「笑顔と未来のギャラリー」があり、たくさんの子どもたちの絵が飾られています。みなさん、女川町を訪れてみませんか。

希望の鐘

被災地の取り組み みやぎ～絆～smile

亘理町

『わたしたちみんなが　たがいに支えあう　りそうのまち』―『わたり』のキャッチフレーズが示すとおり、住人同士が互いに支え合っていける仕組みづくりを目指す亘理ささえあいセンター『ほっと』。町内5ヶ所1,126戸数ある仮設住宅の訪問やお茶のみサロンの展開に加え、みなし仮設住宅への支援活動も始まっている。

「震災からまだ1年半しか経っていない。それでも、被災者の間では明確な意識の差が浮き彫りになっている」とは復興支援コーディネーターの佐藤さんと育村さん。津波被害に遭った人、無事だった人。仮設に一人暮らしの人、多人数暮らしの人。前向きに進める人、被災当時のまま立ち止まってしまう人……。たとえ同じような状況にあっても、抱えた思いはそれぞれ異なる。一人ひとりに合った支援のあり方を試行錯誤する日々だ。

そんななか、みなし仮設に住む親子を主な対象にした「夏休み日帰りバスツアー」を企画。福島県から避難している4世帯も参加して、山形県のリナ・ワールドへ向かった。「バスに乗り込んだときの、こどもたちの第一声が忘れられません」。育村さんは笑顔を見せた。「『○○ちゃん、1年ぶり!』転校して離ればなれになってしまって、1年ぶりに再会したんです。それを聞いて、このツアーを企画して本当によかったと思いました」。どうしても仮設住宅にかたよりがちな支援活動を、こういったかたちでみなし仮設向けに展開したのは初めて。ツアーは10月・11月にも開催が予定されている。

これから先、どんな亘理町にしていきたいか。育村さんは語る。「2年後、復興住宅が完成します。そこに移り住むことによって、いままで築いてきたコミュニティが壊れてしまわないか。絆をつなぎとめる役割でありたい。住みやすい生活の場をつくりたい。建物や町並みが元に戻るのは、10年そこそこではきっと叶わない。人と人との関わり合いの面で、元の亘理町を取り戻したい」。

あの日から「まだ」1年半か、「もう」1年半か。記憶の薄れてゆくスピードに、その差にとまどう人々に寄り添う、ささえあいセンターのスタッフたち。画一的な支援内容だけではフォローしきれない『意識の差』に向き合い、真摯に対応してゆくことが求められている。

夏休み日帰りバスツアー

地元大学生が協力したサロン活動

亘理ささえあいセンター「ほっと」
住所：亘理郡亘理町字旧舘 60-7
TEL：0223-36-7559

七ヶ浜町

今年4月から始めた田んぼのガレキ拾いも9月に終了し、外作業のボランティアニーズはほぼ収束、生活支援へと移行している七ヶ浜町社会福祉協議会。町内の在宅避難者や単身高齢世帯の見守り・サロン活動を継続するとともに、8月からみなし仮設住宅訪問も始まった。

「七ヶ浜の人は我慢強い。それだけに、焦りや不安を口に出さず耐えてしまう人がいる」。七ヶ浜町社協職員の渡邉さんと小野さんは、発災からこれまでを振り返る。「長引く仮設生活で、このまま七ヶ浜に残るかどうか、家族内でも意見が分かれる。『なるようにしかならない』という半ば諦めのような声を聞くたび、胸が痛みます」。

そんな町民同士の関わりをつなぎとめられるような支援を目指す。栄養士と地元の郷土料理研究家が指導する「食の支援（料理教室）」では、住居環境や家族形態の変化で調理の意欲を失わないようにとの目的がある。働く場を設けるため開かれた「きずな工房」では、木工製品や小物、アクセサリーなどを制作、販売している。いずれも交流の場づくりと、仮設から地域に戻ったとき、コミュニティも同時に再建しやすい環境を整えることが、ひとつの大きなねらいとなっている。

外部との交流が盛んなことも、七ヶ浜の特徴だ。花渕浜地区の高山は外国人避暑地として有名で、発災当時も大勢の外国人ボランティアが来てくれた。現在は社協とともに、新たな地域福祉事業や文化交流に取り組んでいる。また、8月に起きた京都府宇治市大雨水害の際、七ヶ浜のグループが社協のスタッフとして資材や人材20～30名を派遣し、即戦力として支援に入った。その背景には、震災時に宇治市社協の職員を派遣していただいた経緯があり、お礼と恩返しの意味も兼ねて駆けつけたのだ。

「これまでたくさんの方に支えていただいた。社協スタッフとして、結んだつながりを有効に、交流活動をどんどん応援したい。そこで生まれた絆を、他地域に、未来に伝えてゆきたいと考えています」。

きずな工房

食の支援料理教室

社会福祉法人七ヶ浜町社会福祉協議会
住所：宮城郡七ヶ浜町汐見台 7-8-153
TEL：022-349-7781

女川町

「先の見えないトンネルを、無我夢中で走り続けてきた」。ボランティアコーディネーターの武石さんは静かに話してくれた。「震災から1年半、長かったのか短かったのかわからない。後ろを振り返る余裕もなかった」。津波による甚大な被害に遭った女川町。災害復旧ニーズはほぼ収束し、地域支援や環境整備（浜清掃など）へと移行している。離島含む女川全域を8つのブロックに分け、それぞれにサブセンターを設立。看護師などの専門員と生活支援相談員を2名ずつ配置し、被災者の心身のケアにあたっている。また、後方団体と各ブロックの自治会長が連携し、交流会やイベントを企画立案。各エリアごとに役割を担ってもらうことで、「住民と一緒に」という意識が生まれる。コミュニティを重視した生活支援が展開されている。

仮設住宅は地域内30ヶ所あるほか、隣の石巻にも約230世帯が暮らす。住宅を建てられる場所がほとんど失われてしまったためだ。「町の大きな問題のひとつに、住居の問題がある」とは事務局長の佐々木さん。「居住、雇用の場が失われるとともに、教育環境にも大きく影響を及ぼした結果、人口流出が深刻化している。女川に残りたい気持ちはあっても、現実は難しい。今後の町のビジョンを静観している段階です」。

山積みの課題を、とにかくこなすことで精一杯だった女川町復興支援センター。しかしつい先日、武石さんにはようやく一息つけた瞬間があった。「2週間くらい前に来て話をした全社協の方から、お菓子とメッセージをいただいたんです。『ねばり強い支援をしていたことに感激した』と……。それを読んで、今日までがんばってこれた自分がいたことに気づきました。震災以降いただいた名刺を改めて見直して、こんなにたくさんの方が女川に来てくれていたんだなと、そのことにも気づけました。心が折れてしまうときもあったけれど、いま、ようやく振り返ることができたかなと思います」。

容易ではない復興への道、社協職員・センタースタッフとしての使命。多くの重圧に耐えながら、それでも着実に歩みを進める。ねばり強く力強い女川町復興支援センターの姿勢がうかがえる、佐々木さんと武石さんの話だった。

出島・寺間交流会

学生ボランティアによる
車いすのメンテナンス

女川町復興支援センター
住所：牡鹿郡女川町桜ケ丘 7-7
TEL：0225-25-4911

今月の「人」

女川町社会福祉協議会
事務職員（震災復興支援員）
稲田　耕太
（社会福祉士）

「こんな女川にしたい、という希望より、女川に住む人たちが『こうなりたい』『こうありたい』と思える気持ちを引き出せる役になりたいです」。同志社大で社会福祉を学んでいた稲田さんは、去年8月、恩師のすすめで宮城県社会福祉協議会に勤務することになり、今年の4月からは女川町社会福祉協議会に派遣されている。主な業務内容は、生活支援相談員14名の活動のフォロー、フィードバック。そのほか社協の事業のサポートに携わっている。

「先月でちょうど1年。去年は何もわからなかったけれど、徐々に物事を見る視点が変わってきているように思います。以前までは『被災者』という勝手なイメージを持ってしまっていて、その人のありのままを見ることができなかった。派遣されてからは少しずつ住民の方の顔が見えるようになり、その人自身と向き合うことを大切にするようになった」。

また、支援者と被災地の距離感について、稲田さんなりの考えを語ってくれた。「短い任期のなか、目先の問題だけこなすのではなく、町や住民の数年後を見据えた支援の仕方もあるのでは、と考えています。外部からノウハウを取り込むことも大事だけれど、もともと地域に根付いたコミュニティや文化をないがしろにしてはいけない。住民と歩調を合わせた支援を心がけています」。

最後に、ともに働く女川町社協スタッフや支援者に向けてメッセージをくれた。「外部から来て感じたのが、みなさん本当に強い使命感を持って働いている。すごい、と率直に思いました。いろいろなものを失いながらも今日まで来たことを尊敬しますし、日々、現場にてたくさんのことを学ばせてもらって感謝しています」。